

< 博士学位論文要旨 >

「認知症」へのカテゴリー化のエスノメソドロジー —介護職者の話しかけ方と質問の分析から—

横浜国立大学大学院 環境情報学府
博士課程後期 (2012 年 9 月修了)

小池 高史

Ethnomethodological Study of
Categorization as Dementia
: Analysis on Initiating Conversations and Asking Questions of
Care Givers

Takashi KOIKE

Graduate School of Environment and
Information Sciences, Yokohama National
University

要旨

本論文では、社会学におけるエスノメソドロジーの視点から、意図的なものと意図的でないものの両者を含む社会的カテゴリーとしての「認知症」へのカテゴリー化にかんする私たちの普段の実践に焦点を当てた。介護職者と認知症患者による特徴的な会話場面に焦点をあて、「認知症」へとカテゴリー化する実践を詳細に記述した。その作業をとおして、介護の日常のなかで、介護職者がどのように会話の相手を「認知症」にカテゴリー化しているのか明らかにすることを目的とした。まず、高齢者福祉施設や自宅での介護の実践を記録した複数の映像作品を分析対象とし、介護者が認知症患者に話しかけるさいの特徴的な方法を把握し、詳細に記述した。具体的には、話しかけるときの体の位置や視線と体の接触に焦点をあて、介護者の認知症患者への配慮について考察した。また、高齢者福祉施設でのフィールドワークの記録や映像作品を分析対象とし、質問するという行為をとおして、介護者が認知症患者をどのようにカテゴリー化しているのかを記述した。とくに、テストとして用いられる質問に焦点をあて、認知症患者がテストの対象とされることについて考察した。分析結果から、介護職者は丁寧に話しかけることや自分の知っていることについて質問することで、相手を「認知症」にカテゴリー化していることが示された。

ABSTRACT

This paper focuses on how general use of the social category “dementia” has been put into normal social practice (both intentional and non-intentional instances) from an ethnomethodological perspective. In addition to the research examining both intentional and non-intentional categories, this paper also details categorical usage of the term dementia by focusing on distinctive conversations between patients with dementia and their care givers. The purpose of this research is to clarify how care givers categorize the person they are talking to as “demented” within their daily work. Firstly, I analyzed multiple video recordings of caretaking at nursing homes and private residences and gave a detailed description of the particular methods care givers used when talking to persons with dementia. Specifically, focus was put on body position, eye contact and body contact when the caretaker spoke to the patient. Consideration and compassion towards the patient was also discussed. Secondly, I described how care givers categorized persons with dementia in the act of asking them questions by analyzing videos and recordings of interviews taken at nursing home fieldwork sites. Particular focus was placed on questions used in tests and how dementia was treated within these tests. This paper suggests that by talking to patients formally and asking them about things they already know, care givers are placing patients in the category of “demented.”

1 目的

本研究では、エスノメソドロジーの視点から、社会的カテゴリーとしての「認知症」へのカテゴリー化にかんする私たちの普段の実践に着目した。その実践には、意図して行っているものもあれば、意図せず行っているものもある。本研究では、意図的／非意図的なカテゴリー化実践の両者を対象とし、介護者と認知症患者による特徴的な会話場面に焦点をあて、「認知症」へとカテゴリー化する実践を詳細に記述した。その作業をとおして、介護の日常のなかで、介護者がどのように会話の相手を「認知症」にカテゴリー化しているのか

明らかにすることを目的とした。エスノメソドロジー（人々の方法論）は、私たちの普段の社会生活や一般的な研究の前提となっている何気ない行為、認識、判断のあり様を記述しようとする考え方であり、その代表的な手法として、日常会話を詳細に書き起こす会話分析がある。

2 研究方法

第一に、認知症という病気とそれをめぐる当事者たちの社会関係の諸側面をまとめた。まず、認知症の症状や医学的側面についてまとめ、現代の日本社会にお

ける認知症をめぐる状況を概観した。つぎに、認知症患者自身の視点から、認知症になることがどのようにとらえられているのかをまとめた。それを踏まえて、これまでのケアの実践のなかでどのようなケアが理想とされてきたのかについてまとめた。さらに、社会学の立場からこれまで認知症がどのように語られてきたのかについて論じた。ここでは主に、ミクロな視点から認知症になる過程や認知症患者を介護する過程について、社会学的に考察されてきた成果をまとめた。そして、本研究にとって重要となる認知症患者との会話についての先行研究をまとめた。最後に、認知症カテゴリーへの歴史的なまなざしの変化についてまとめた。

第二に、本研究の理論的支柱として、H. サックス 1) によって開始されたエスノメソドロジーによる社会的カテゴリーの研究と、これまでの成果についてまとめた。そのうえで、「認知症」という社会的カテゴリーが、エスノメソドロジーの文脈のなかでどのように位置づけられるかについて論じた。

第三に、高齢者福祉施設や自宅での介護の実践を記録した複数の映像作品を分析対象とし、介護者が認知症患者に話しかけるさいの特徴的な方法を把握し、詳細に記述した。具体的には、話しかけるときの体の位置や視線と体の接触に焦点をあて、介護者の認知症患者への配慮について考察した。

第四に、高齢者福祉施設でのフィールドワークの記録や映像作品を分析対象とし、質問するという行為をとって、介護者が認知症患者をどのようにカテゴリー化しているのかを記述した。とくに、テストとして用いられる質問に焦点をあて、認知症患者がテストの対象とされることについて考察した。

3 結果

認知症患者は、アイデンティティの危機にさらされ(自己を失い)、介護者との関係のなかで捉えられ(他人に依存し)、コミュニケーションがうまくとれない(会話が難しい)人であると、社会的に意味づけられていることが分かった。「認知症」という社会的カテゴリーにカテゴリー化する実践は、「自己を失い、他人に依存し、会話が難しい」ことを可視化することであると理解できた。

「認知症」という社会的カテゴリーは、一方で異常な状態を示す逸脱的カテゴリーの一つとして位置付けることができた。他方で、介護者-被介護者という二者関係のなかでとらえられる関係カテゴリー 2) の一つとしても位置付けることができた。また、カテゴリー化実践にかんする先行研究の多くは、当事者間の会話場面を取り上げていた。とくに最初に話しかける場面や質問を契機とするやり取りは、カテゴリー化が分かりやすく生じる場面として扱われてきた 3) 8)。

話しかける場面の分析のうち、量的な分析では、認知症介護場面での話しかけ方について、介護者が相手の横もしくは正面の位置にきて、相手のほうを向き、相手の顔を見て話しかけることが多く、また相手の体に触れ、相手の名前を呼びながら話しかけることが多いことが分かった(表 1)。これらは相手の注意を得るための努力であり、認知症患者に話しかけるさいに、相手の視線を得るのが難しいことが示唆された。質的な分析からは、話しかけるさいの体の位置が、空間の広さや障害物といったその場の環境のなかで適した位置が選び取られていることや、相手の体に触れるさいには、体の位置やそれまでの体の接触などの状況にあわせて適した触れ方をしていることが示唆された。

表 1 介護者の話しかけ方 (カッコ内は%)

体の位置	体の向き	顔の向き
相手の横…………… 49(59.0)	相手の方向…………… 74(89.2)	相手の顔…………… 71(85.5)
相手の正面…………… 21(25.3)	相手と同じ方向…………… 7(8.4)	相手の背中…………… 6(7.2)
相手の背後…………… 6(7.2)	その他…………… 2(2.4)	話題となるものの方向… 3(3.6)
離れたところ…………… 7(8.4)		自分の手元…………… 7(8.4)
接 触	呼 名	視 線
なし…………… 55(66.3)	相手の名前を呼んでいる…………… 46(55.4)	相手の視線を得てから話しかけている…………… 28(33.7)
肩…………… 11(13.3)		相手の名前を呼んでいない…………… 37(44.6)
手…………… 9(10.8)	相手の視線を得る前に話しかけている…………… 55(66.3)	
あり		
腕…………… 5(6.0)		
背中…………… 2(2.4)		
足…………… 1(1.2)		
計…………… 28(33.7)		

認知症患者への質問の分析からは、相手をテストする目的で為される質問が多く生じていることが分かった。患者の記憶を試す質問だけでなく、患者の理解や聴取を確認するためのテストもあった。質問の姿をしたテストを通じて、会話当事者間の上下関係が確認されていることが示唆された。日常的に記憶や能力を試す質問が為される認知症介護の場面は、つねに介護者と患者の能力の差が可視化される場であり、テストを目的とする質問によって、患者は「認知症」という社会的カテゴリーに分類されるということが示唆された。

4 考察

介護者は丁寧に話しかけることや自分の知っていることについて質問することで、相手を「認知症」にカテゴリー化していることが示された。また、それに伴い患者の「コミュニケーション能力」や「意思」が可視化され、社会的事実として構成されるのであった。介護者が認知症患者に丁寧に話しかけることで、患者の「本当のコミュニケーション能力」がどれくらいであるかにかかわらず、「会話をするのが難しい人」であることが可視化される。同様に、介護者が患者に「たいしてはい」か「いいえ」で答えられる質問を行い、肯定もしくは否定の返答を形式的にでも得るといふ意思把握の手続きを踏むことで、患者の「意思」が可視化されるのである。

丁寧な話しかけ方は、認知症ケアの現場で求められるスキルであり、相手の体に触れ名前を呼ぶことは、認知症患者とスムーズにコミュニケーションをとるための方法でもある。認知症介護の効率性の追求は、認知症患者らしく接することを助長させることもある。つまり、認知症へのカテゴリー化は優秀な行いや善意ともなっても起こりうる。

会話分析の文脈での本研究の貢献としては、第一に認知症介護という制度的場面で介護者の話しかけ方に偏りが見られることを明らかにしたことが挙げられる。話しかけ場面での動作については、これまでに多くの研究の蓄積があるが、認知症介護の場面で特徴的な話しかけ方がみられ、それがその場を「認知症介護」らしく見せていることを本研究は明らかにした。

第二に、認知症介護場面の質問を分析するなかで、会話途中で質問の種類が変化する事例について記述したことが挙げられる。一つの事例では、二者択一から「はい/いいえ」質問へと、異なった種類の質問が為されていた。これまで会話分析の先行研究では、質問発話の種類とその意味や機能について多くの検討が

重ねられてきたが、会話途中での使い分けや異なった種類の質問への変更といったことについては、あまり考えられてこなかったのではないだろうか。本研究では、会話途中の質問の種類の変化が、それ自体で一つの機能をもちうることを明らかにした。

本研究の限界としては、分析した場面が限られていることが挙げられる。本研究で分析した場面の分析のみでは、「認知症」へのカテゴリー化実践を十分に捉えられたとは、必ずしもいえない。本研究で対象としなかった日常的にはカテゴリー化が現れないような介護者の行為のなかで、「認知症」へのカテゴリー化が果たされることがあるとすれば、それは会話分析研究の興味深い分析対象となる。また、本研究では介護者と患者の会話における介護者によるカテゴリー化だけに焦点を絞ったが、それ以外にも、介護者-介護者間の会話における介護者によるカテゴリー化、介護者-患者間、または患者-患者間の会話における患者自身によるカテゴリー化など、認知症介護の場面に限定しても、多様な状況における「認知症」へのカテゴリー化が生じているものと推測される。今後、分析対象を広げていくことで、認知症介護場面における「認知症」へのカテゴリー化実践の過程が総体的に明らかになっていくものと考えられる。

認知症患者とのコミュニケーションをテーマとした研究では、これまで介護の実践を評価し、直接その改善に資することを目的とした臨床系の研究が主流であった(9)11)。2000年代後半以降、認知症介護場面の会話分析研究がわが国でも行われるようになってきたが、まだ十分とはいえない。臨床系の研究では、介護者と認知症患者のコミュニケーションのなかでも介護実践の評価や改善という目的に直接関係するコミュニケーション上の課題に限って取り上げられることが多いが、会話分析の手法をとる研究では、当事者にも意識されていないほどに当たり前になっているコミュニケーション上の特徴も、あらためて分析の対象とされる。そのような会話分析の視点によって、本研究では介護者の丁寧な話しかけ方や自分の知っていることについて質問することが、認知症患者を「会話をするのが難しい人」や「理解力を疑問視される人」であると示すことにもなることを明らかにした。おそらくこれらのコミュニケーション上の特徴は、当事者に意識されていないほど当たり前なものになっており、介護において改善されるべき課題として取り上げられることもないものである。会話分析によって明らかになるのは、介

護者の工夫によって解決できるコミュニケーション上の課題であるよりも、むしろ介護という行為がもともと有している矛盾である。その意味で、認知症介護場面の会話分析は、実践にすぐに役に立つ知見をもたらすことは少ないかもしれないが、当事者が介護という行為自体を見直すきっかけになる知見を生み出す可能性も持っている。このように、会話分析というアプローチが、認知症介護場面におけるコミュニケーションの深い理解のために、有効であることが示された。今後さらに多様な認知症患者との会話場面が会話分析の対象となり、つまびらかにされていくことが期待される。

<文献>

- 1) Sacks, Harvey, 1972, "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology," Sadnow, David ed., *Studies in Social Interaction*, New York: The Free Press, 31-73. (=1995、北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法——会話分析事始め」『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社、93-173。)
- 2) Pomerantz, Anita and Mandelbaum, Jenny, 2005, "Conversation Analytic Approaches to the Relevance and Uses of Relationship Categories in Interaction," Fitch, Kristine, L and Sanders, Robert, E eds., *Handbook of Language and Social Interaction*, Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 149-71.
- 3) 石飛和彦、1992、「問題設定装置としての〈帰国子女〉カテゴリー」柴野昌山編『国際化社会の中でのナショナル・アイデンティティーの形成過程の研究』1989年-1991年度科学研究費補助金研究成果報告書、京都大学：8-26。
- 4) 西阪仰、1997、『相互行為分析という視点』金子書房。
- 5) 阿部耕也、1997、「会話における〈子ども〉の観察可能性について」『社会学評論』47(4): 19-34。
- 6) ———、1999、「〈子ども〉の見つけ方」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社、101-23。
- 7) ———、2011、「幼児教育における相互行為の分析視点——社会化の再検討に向けて」『教育社会学研究』88、103-18。
- 8) 前田泰樹、2005、「知識を示す能力・経験を語る権利——言語療法場面の相互行為分析 2」『東海大学総合教育センター紀要』25: 13-39。
- 9) 吉川悠貴・加藤伸司・阿部哲也・矢吹知之、2005、「模擬会話場面のVTRを用いた介護職員の発話スタイルの評価」『日本認知症ケア学会誌』4(1): 51-61。
- 10) 前田浩美・原山幸子、2008、「不安感から不穏につながる事例を通して——生活歴を認知症介護にどう取り入れるか、よび方を通して検討する」『認知症ケア事例ジャーナル』1(1): 76-80。
- 11) 吉田恵・大久保幸積、2008、「激しい徘徊とすぐ怒る入居者に対するアプローチ」『認知症ケア事例ジャーナル』1(1): 108-13。